まきのはつ
七

陶山書庫

幻住菴記

芭蕉翁

夫俳諧文章にいふ〳〵への体格ちり〳〵貞徳宗因もいまだそれを
体を立て蕉翁に至て始て漢文の格を用ひて和文をまぜ〳〵もちゐ
漢文より眤まぢて又和文にも亦た只自己一風の俳文を興し
て格を漢文にそなへ又狂文ふたの〳〵又対を取て書く
爰に〳〵そハ自然にあふとなく対のやうにもなりたるまて好て
対を書くるにハ〳〵其坊ハ仮名文の体なれハ長明の名利
に云詞のかぎりを求て対を好て書越こ〳〵ワ〳〵ろにより
不ぐらまを書こ対をちぐ〳〵くらをつれバ名にして仮名の本

意にあらんかの古今集序をもに曰ふ水は住るハづちなど
やうふちまぬぐるもれのづのいろくるがめてたきと云云
ホの意を以て本意として又漢文の体を斟酌して用ゆると
心得てし記を後学李許両撰字陀法師に云俳諧文章
のるを習ふてかゝる也 題別俳諧の文章といふるいはこの
ちうつ本作元源氏狭衣の歌皆く連歌の文法之故に先
師一格を立て門人に伝くすまれ伝るみるに書ちゝ人もなを
当流の格式をちゝざれハ序授ひきする多 序記賦説解
箴辭などすゝつ差別ある趣 生名文章ハ字法をもて造
にあるり伝れと仮名ちのまハ会のるのゝ多ゝと云云されハ序記
賦説解箴辭辯誄文の十体も祖翁始て一格を立て門人に教

ふにて古来仮名文ハ右の十体のゆちゝ只生名仮名の文
の体をまゞへて狂文を通れて別に蕉門俳諧の文章一格之とる
ゝ 又鄙言と俳言との差別なり野にして凡を通ずる時ハ鄙
もとるへし 幻住庵とハ幻いまだろゝと訓ずるにもたのふべき
よもあゝふ定の意之金剛経云一切有為法如夢幻泡影如
露亦如電應作如是観云云世ホ住人の朝の紅顔ゆふ方の白
骨きのふゝ人りふいふて看彼の上ゆ幻の住所之也
ゆる二字禅意楽門の庵名とるゝ庵とハ釈名云草ハ
為圓居曰庵々ハ庵也以自覆庵也記とハ説文云疏也疏記一
々分別記之支考文操曰祖翁に幻住庵の文ハ三通なりて始
ゆ一通ハ落柿舎にあり中の一通ハ賦之終の一通ハ猿蓑集

坐といへり 賦ハ支考文操に出より 奥の細みち著せ孤松芭蕉の
侍に元禄三年の夏石山のおくに幻住菴むすび四年の秋まで寓
に侍る此間嵯峨日記なりといへるハ疑ひなし 今按るに元禄
三年の夏の始より其年乃初冬の頃を住家にする筈し 例の十
日ともゑて満る氣まてハ又てき我胸の中を石祖神のさゝカ
ありと語られし晋子か書残せるをとく久しく止りゐなかに暁きよ
もなかりし幻住菴几右日記ハ門人の書音或ハ各々尋訪せし
時の発句を記したるに其中に冬の句更になし いかなれども冬
三月書音の絶へきや又訪れもせざりしや又明年弥生
尋旧菴といへる嵐蘭か句にてもさるべし 此明年といへるは
三年の翌年の夏にして元禄四年なる事疑なし いかにとなれハ
此集撰四年初夏に成て仲夏に支草跋を書けるに四年をも行のふ
にハ嵐蘭か句ハ五年の春の句なるべし なんぞ跋後の撰入なふる
ほしんや又膳所へ行人に獺の祭見て来よ瀬田の奥しをしれハ
元禄四年の早春乃頃下りて幻住菴を見て来よといへる事つゝあ
ハ疑なきなり

石山の奥岩間乃うしろに山有國分山といふ
そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし

石山ハ江州瀬田の南にして国分山ハ瀬田より石山を左に見て行事
一里計也又石山のおくにといへるハ岩間ハ岩間山正法寺と云元正帝
の朝に越ノ泰澄建立ス本尊千手観音ハ西国順礼第十二番の巡

拝ありして岩間寺と云是なるがなどいむかしよりいへる義ありして
文字たゞ往昔の字を用ゆる也上古より此処に国分寺ありしによつて
今にこの山を国分山と称するといへる義也国分寺は聖武帝の草
創にして六十余州に建立ありし今江州の国分寺頽廃(タイハイ)して名
のミのこれり本尊の薬師仏は埜の村中にありて別保の薬師と云

林藤の細き流れを渡りて翠微に登る事三曲二
百歩にして八幡宮たゝせ給ふ

翠微(スイビ)とは山の異称にしてやゝ山のなかばをいふ山気青黛色と云
説によるも又山の半腹のこともいふ也爾雅に山未ダ及ハ上ニ翠微ト云
謂ク未ダ及ハ頂上ニ在テ旁ニ陂陀(カタクヅレ)之処ニ是なれば家の翠微は其腹のことを
いふなるべし三曲は七曲九折(ツヾラヲリ)などいふ曲と同意なるが登るところまがり
二百歩ばかりも申して凡をいふなりこゝは八幡宮の社なり是八幡宮は人王十六
代応神天皇にておはしますなり廿二社次第ニ云八幡三所応神天皇神功
皇后玉依姫貞観元年九月十九日行教和尚於テ男山峯ニ建立スと有より
後諸国に祭る所多くあり此八幡宮は国分村の鎮守にして近津尾八幡宮と云

神体は弥陀の尊像なりや唯一の家にては甚く
忌なる事か両部習合光を和げ利益に塵を同
うさせたまふにや又よし

諸神鎮坐之記ニ云山王七社之聖天子者八幡大菩薩也乃至本地阿弥
陀如来也と唯一の家とは唯一神道の社職の家といふなり唯一神道は

日本正統の神道にして佛法を甚忌る日本は刹鬼なるなり
元は釈門の徒弟の姿風にして伊勢太神宮へ参詣なるなり
されども延喜式齋宮忌詞内七言佛稱中子一云立須久弥経稱
涤紙塔稱阿良々伎寺稱瓦葺僧稱髪長尾稱女髪長
齋稱片膳又外の七言といふなり
されども新に空海最澄の徒入唐帰朝の後以佛混神混交
無差別為跡と称して表は神と現し本地と称して裏は佛なるを
神佛を混て表裏陰陽を以て説を設けたるを吉邪神道といふなり
仏かに神となりはて日本を変じ本地垂迹説すれば佛は本体
実地といつる意なるべし故に吉邪光と和け利益の慈と同
志なるべしまたまたかなるよて老子経和其光同其塵と文と

一作して新に用ひられたる和光同塵は結縁の姿と謡曲に謂
りまたまたといつる所なる生を結縁の為なるといつる義なり又佛法附
會神道以胎金両部配于陰陽以佛神為同一體者両部習
合と云ふなれば密教の胎蔵界金剛界の両部を神の道に習合
をなす又日本神道三種なり一曰唯一宗源二曰両部習合三曰本跡縁
起と云なり唯一とは吉邪なりその後の名なるなり

日は人の皆さまれいさまに神さまにおはさしまし
新傍は住吉にして芋の戸をあけさせ根笹彩
をうきいと屋多りり屋苔落て狐狸姉にとは
さり幻住菴と云

源氏蓬生の巻よりえらすゝ荒たる一家の内いとゝ狐のすゝとゝ成
てうゝほゝうゝといへるなどの一特作なり又西行上人の歌にこれや
ゝ一首すゝゝん法ゝゝむ蓬ゝ葎ゝ月のかゝるゝ又發心集
にたのゝゝよいのち化れハすむる乙さゝうゝゝたるゝ乙ハ他人の面
ふゝゝゝたるゝ乙ハ風ゝ破れ目にくちぬゝゝ乙ハ狐の類も思ゝ合
狐狸妖ゝゝをあらゝとハ蓬生の一特ハ勿論ゝ古寺の軒の稽ゝ
ハゝゝたれてあゝゝ狐のふゝゝゝかな（後京極摂政）人すまてゝ荒
ゝ古寺ゝ狸のゝゝ（叡蓮法師）ゝゝうちゝ乙ゝ歌などゝ通乙
てゝゝ所ゝゝて夕日ハゝゝゝゝ屋根ゝ壁ゝてゝゝゝる
文勢自然ゝ破屋のさびゝゝをのゝる時ゝ神さびゝゝ神
さびゝゝゝゝ宮ゝ宮びゝ庚ゝの類ゝ同ゝゝゝゝ

をゝゝゝ夫利の反備ゝゝゝゝびゝゝゝゝゝ語遊考にゝゝゝ

あゝゝ此僧伝のゝゝハ勇士菅沼氏曲水子乃伯
父ゝゝん伝ゝゝ或今ゝゝハ三年（トセ）計むゝゝゝゝ
りて正ゝ幻住老人の名をのゝ残せゝ

菅沼氏曲水子ハ膳所侯の家士通稱を外記ゝゝ幻住老人ハ同
侯の長臣本多八郎左衛門ゝゝ稱ゝ探山居士ゝ号ゝ天和年中
有餘歲にゝて卒ゝゝゝ伝ゝ正ゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
當然ゝいへるゝゝゝ

予又京中ゝゝゝる事十年（トセ）計ゝゝて五十年（ゴジウ）ゝゝ

ちこのさ才ハ蓑虫なみの浅失ひ蝎牛ハ[illegible]を離

[illegible]て

市中をさまよハ世路をいとゐ俗塵をのがれさるいふ義ニハ祖翁

四十七年乙卯より五十二年やちのさいふ上の十年ハとそ[illegible]

下の五十二年ハ音にて読ゐ[illegible]もてふぶれハ文章語路ゝの八ハ下ハ

文にかゝいへとも[illegible]ひとゝ[illegible]を好ゝ山野に路をかくさんとゝ

ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ病才人ハ倦て世をいとひ人ハ飽たりといふ不安

の市中をさるといふ不思議合せてゐる勢ひ其志の高さ

[illegible]ゐ蓑虫のみを失ひとハ古歌に[illegible]の出のそれ失ひむ

自乃教を父よ母よと呼ぶ[illegible]ぬる又[illegible]みの出入する木の葉を[illegible]

[illegible]ゐ[illegible]なき秋の雪乙仲正これホをはみゐるを蝎牛のかハ

ハ文末集に[illegible]家をすてゐ心ハおゐ[illegible]かつふを立ふ[illegible]ぬ

世なれ古歌によれるゐもゐ[illegible]ゐ[illegible]自然に上達のこ[illegible]

詩歌連俳同一軌たゝ[illegible]

奥羽象潟の暑き日よ面白こゝ高きなこ

あ[illegible]ゐ[illegible]き小海乃苔碑をすゝ[illegible]

奥羽象潟とハ奥州羽州といふ[illegible]ゐ[illegible]象潟とハ[illegible]

文章をなゝ[illegible]ゐ陸奥の国を分て出羽とせ[illegible]ゐ[illegible]ハ和銅五年陸奥ノ二郡ヲ割テ出羽ヲ奥の出羽とハ作意にして宮よ嗤嗔簿がきになゝぬ[illegible]

祖翁栖去雑に橋町といふ処に冬籠して[illegible]ゐ[illegible]ぬ

此文体は通り高すぎる所なきと句を切て読むべし是れ所なきと
なやめるといふ事を見えたるしき北海の荒磯に浪を被りといふ
げけるに浪を被りといへる処に二るすべきことに似て一連の文にして
祖翁一風の文章と読みに趣あり須磨明石浦のみならし近くて
となきてくるしきさるすることが　光俊の家集に見えたる浪のうねり侍るへき
て所なきてくるしきこらしめたる資　雅因

一歳湖水の波に漂ひ入鳰の浮巣が流るまじき
芦の一本乃陰たのもしく

近江の湖水を鳰の海といふ縁より生ずる文にして夫木集に
かくれなきやかはのうきすみいかにしてさすがにわたる世をたのむらん

鳰といへる題を含める句とや石山の夷と書きたるを家にて
すゝ趣りと味ふべし鳰の浮巣の流るまじきなりの心とも今年と八重名にする
建春門院の殿上の歌合に於て政水なる近則といふ人題にて子をおりふし本
のうきすみやかしきまでもとすれやみさくまでもさぬ此哥めづらしとて
かちにき祐盛法師是を見て大きに難じていたく鳰乃うきすみをとえ
ちつぬまこそうの巣もかしまあらく趣きものなれ海のしおハうちひ
れとのなれハ拌られもて子本の浮巣をとふにハあしのくきを中にこめて
ちぢもかれはハくれろげてめぐりにくひされハちかきそへ八うくへながらもちる
ひきハちかめでくぐる之ををくよかむれなりをんよハ風ふけばいづくともな
かれいで大浪かふかれ人かしられぬ也し　下略　なり此一本と云
処の義此ゆ迄似る也し　江洲湖水に鳰もやなる多しとて鳰の海と云

俗にかいつぶりと云なるは漢名ハ鸊(ヘキ)鷉(テイ)一名水胡盧(スイコロ)

刹瑞茨(フキ)あしろゑの垣子路添なとして御目にみかい
とうりてめに入りし山のやゝて生しとさへみりひそ
こぬ

茨ハ字彙ニ以茅(チカヤヲ)覆(フキホフ)屋(イヘヲ)也とみえたり婦きと読むし 西行山家集

つらしみ山やゝて生しとおりふすを花ちりなさとくやまふん 拾玉

まれたれるさるうき世をすてゝ柴の戸をやうそねしと思ふすそとも

されろみ其の名所も遠つかしれつ咲より
山茶杏年巡りて時なるやそしる種宿

うしなるは役さへあるを木つゝきのはしらもいそく
なしとそ乃ふ奥しりて

されはおくのしきのことゝいふは同じ 真間語遺考に委しく解
り春の名所も遠からぬは卯月のみといへるを見て之山茶松まかつま
て附なるは方丈記に其ハ茶浪をとる紫雲のめくにして西の方に
白ふ夜ハ附なるもとすからふ毎まとまての山路を数るとぞ 又狭に
茶ハ松まとのそみりて咲かまて待数ありとぞ ゝ竟等まりに酒ふ
にや宿りしなハ山家集の歌を引て営むといふ説なり 又樫鳥(カシドリ)ハ
すみしりて宿とにかゝまてまするともいへり 予ハ風俗文選に燕といふ
つるよ従ふ啄木鳥(キヅキ)ハ俗傳に守屋大連(オホムラジ)の霊なるとありて佛閣を

つゝ破るゝ云まゝ[illegible]て一名をてらつきといふこゝ字にその緣を用ひて菴を破るといふる意を含て文字をなすこゝされハ宿るを人の音信も所なるハ什麼ハ木つきのつき破るゝいゝこゝ[illegible]と仏書く文字こそぐろハ坐の字をこゝ用ひわけるをくゝと云義こゝ漢書注に無故也とこゝろ[illegible]ハ一章ハ祖翁自適の詞こゝ

魂呉楚東南坼[illegible]身ハ瀟湘洞庭ハ昔

川山ハ未申よりたちきたりて南

薫峯よりたゝ北風海波浸して涼し

見ゆる風景を演る文こゝ杜子美登岳陽楼詩に昔聞洞庭水。今上岳陽楼。呉楚東南坼。乾坤日夜浮。此詩より一

消して魂こゝて走りと化きるこゝ又杜律瀟湘洞庭虚應空楚天不斷四時雨こゝも作れり瀟湘ハ瀟水湘水とてぬゝつの川ハ名こゝ為川洞庭湖ハ流れ入こゝ洞庭ハ楚國永州のうち半岳州ハ屬す唐土山水の勝地こゝ幻住菴より湖水の眺望をこゝ勝地ハ出るこゝ洞庭ハ立うと思ふこゝ書く文こゝ味ひこゝ人家よりこゝ松ハ陽るこゝハまこゝうこゝ近かこゝ景色十分たこゝ南薫ハ夏の風をこゝれハ風景をこゝ家語云南風之薫兮可解吾民之慍兮又呂氏春秋の八風ハ東南ハ薫こゝ唐太宗詩云薫風自南來殿閣生微涼こゝの文ハ假名文を作ゆこゝて緩寛たるゝ春のゝ此陰川を流こゝ此陰ハ約急ゆこゝて尋の岩上より曝布の漲り為こゝ勢ひこゝて妙境こゝ尽まゝ真名文の作格こゝ祖翁一風の文格こゝ

とまるべし　真名文作るかに魂家薫風の下よハの字を省てかくなり
語路を急ぎするの文法を学ぶ者心を用ひて會得すべし

日枝の山比良の山根なり峯の乃松ハ雲
こめて梢を搖す約なり　みなの里笠なり小
かすむ木樵の彦樵の小田早苗なる
の雨晴れなり夕雪乃空ハ雪乃空ハ
言美景物なりなり事なり

日枝ハ伝教大師延暦帝の勅を奉りて山を開く叡慮を以まるの儀
を以て比叡山と改るなり比叡ハ景物をかぞふる文に比良の峯根峯
嶺の松人の知る所に城とハ膳所を云橋ハ勢多を云比橋ハ志賀郡と

栗木郡の境にして長九十七間幅七間に小橋長廿七間幅四
間中島の間十五間合せて百九十六間ノ長橋に笠取ハ山城の名不
すて笠取山と石山より一里近江山城の境にて岩間寺より三十
丁計西に支木集西行法師の詠ある所なり
詠まれぬる所の山又山中無事樵唱有時聞なるの詩の侍も
なるべし　小田ハ苗なるハ山水集に田ハ苗なり女のなり
されて山田の苗なるまてなるの侍　笠取ハ拾玉集
おの大井川なるハ隔なるなるの空なるつづけ
さみなりなり軒なるハ歌ハ苗なりなり山水集に梅人の知ハ
る必地なりなるなるなり水軒なるなり　美景ハ風景のなれた
るを云文選謝霊運詩序云天下良辰美景賞心樂事四者難

并云

中世之上山ハ士峯の俤をかよひて武蔵野の
古き栖もおもひいでらるる田上山ハ古人をしのぶ

中世ハ平氏系の中世をいふ義也士峯ハ富士山のことを云也三
上山ハ富士山の形に似たり一名百足山又近江湖ともいふ
おもひいでらるるハ根遠き俤をちらしこかねの山ハ偽の事堯孝法師ことを
富士に似たるより武蔵野の古きすがたもいでるなり深川の芭蕉庵
より代脚句を家にあり山生をいふ意也田庵を思ふよりして
又古人をしのぶ思ふ心を起せるなたちかふふ古人をかぞふる方
大記栗津の系をかて浮丸翁が伝を引ハ田上川を隔て特丸

ちかき墓をたづぬ又ハ名所にたちかへりの下にてづをいふたりてそ
こを特丸ちかきの墓なりの左の境ホてそこの券ケンを書のをとられを人を
なをもまつりこそ又志賀山の下正覚寺村よりの宮を云ハ
貫之を祭りたるもこれにむかふふるよやられる月氣のあるうるさう
の世よりそなりなを此歌よりて名付ることかやを社のかたをとり
黒主の社と在志賀の黒主とそ又田上山の下ハ俊頼の古
跡なり是等ハ人をしてかをふをちるなりく水源寂室
和尚の偈頌に五更起坐聴松風等故人未半作空作られ意ハ
も通ひて了ぬる江湖集此故人ハ知己を云ふ古人のことを計をハ知れ

さて亦ろ嶽子夫ろ事禅膳といふ山を黒津の

里はいと久しう成りて 羽代なるよろとよみる
人麻呂集集の姿なりけり

さゝをだけはまぬるたけのるゝ名寄に田上のさゝ羽のたけまたく
るめりとやまぬるこのあるさゝあぬる年 後拾遺 小竹生てかくゝ姿なり
通雅にて上人おゝ称なる初かゝたるゝけさゝ羽うたけて
幻住庵より東の方田上山のたぎまゝ上ふ夫ゝ峯はゝ尾より坤の方
ふたのゝりて頗るゝ山ゝゝ侍驟はゝ夫ゝゝより一里計南の方にて
勢多田川より西の方ふ秀りてゝ西るゝ是津は近江甲賀郡すて田上山
の禁ゝ石山より湖水を堅だてゝ向ゝさゝは是津の里はいと久しう成
りてゝいふ所実ふさもと思ふる名寄まつるゝめうゝふよちく孫蘇

して是つの里まなれたるゝび 後重つるゝとは田家まて藁藉ゝ云も
のゝ荘丹いゝく掘るに茅屋集方三柿本彩信人麻呂近江のまよ
り上り来る時宇治河辺まりて歌を作る一首をかへ一うゝにかゝ
ゆゝ八十氏河のたゝろ木はいさよふ浪乃ゝゝゝすもゝたゝり河ろ
るふゝゝまある歌是ゝゝ思ふまゝ文の詞は羽の詞なゝゝゝ是津
ゝいふよりいとゝゝろう成りてゝかけて羽代なるゝゝはいさよふ浪乃
ゝゝゝゝゝゝもいへる心なれはいるも荘丹ゝ考のてくるゝゝり
又たなるゝゝ是つも同ゝ宇治川のたぎまゝれは羽代なるまてゝ読け
人乃集集のあとは実ふ羽の一作なるゝ是津の里の羽代守
ゝいふ歌はる歌まは是ゝゝれは説くむづゝ古集ゝいる十五
巻なりりゝまはまなりやゝいへれどいまゝゝゝは伴なゝ

猿眺望ハ高なる峯より後の峯より這のぼり松の棚作業ハ因性なり成て猿乃腰掛と名付

猿ハ高き所にいとゝ義に眺望ハ風景をながめのぞむる義に侍るゝんとハ眺なく見さきんといふ義に松の枝つゝりハ松の枝に棚をかきてゝ上ハ因性を敷て涼を納るためのやをつくりしに納涼をなして四方を詠めやるにゝけるに筍のごとく猿の獨かけ〻多分られしに旋所松枝架作棚蒼髯如戟畫峭崒清陰堪愛還堪恨遽却斜陽礙月明と作りし陳元信ハ松棚の詩などの風情もみるに合せるゝ又杭州の鳥巣道林禪師ハ秦望山の松上ハ棚を作りて樓居しれハ時の人鳥巣禪師といふ樂天と友たり

彼海棠ハ巣をいとなむ乙主簿峯ハ菴成る王翁除佺ハ徒ハあるに

翁松ハ架つくりて出りまふより異乙合せ彼海棠に巣をいとなむ乙主簿峯にゝやどれしに山谷集巻之一頁題瀟峰閣徐老海棠巣上詩ノ註除佺樂道隠於藥肆中家有海棠數株結巣其上時與客巣飲其間又王翁主簿峯菴詩註王道人參禪四方帰結屋於主簿峯上嘗有毛人至其間問道乞等の道人ハ乙ハ乙ハ乙ハ乙義に

喧騒辟山民と成て居成なけ生しを

空山子風流打て唾す

聽癖の癖癖と通すくせ〳〵訓ず癖史云李嚴老聽好衆人會食罷皆棋下嚴老輒就枕聽衆數局閲一度展轉云我始一局云云又宋書云陳摶隱居華山不仕常喜鼾聽小聽半年大聽三載云云是聽癖なり又五雜組云聽を嗜とのみ邊老先杜牧其外數人皆有此癖又陸放翁ら聽癖詩ありなり騷人の癖をいふに屏子顔とハ山乃をだやうちるのかさちをとる唯要兩脚飛屏子顔といふる事坡ら詩句を將作して思をたゞけ生とゝ作る欲空山と對をとゝみるにあらず山民と云より總て山中のるをとゝ又東坡ら詩に攝衣步屏子顔といふ空山ら風とハ石林詩話云青山押風坐黄鳥狹書眠これ山居閑寂のさまと又王荆公ら詩ら押風對青山ら作ら空山とせ所將作と

さまゝ心ゆくちる時ハ谷の清水を汲て自ら炊くゝゝの茶代僕て一碗の備へいとゝ

心閑なるハまめ〳〵しくさ事にして俗ら気かるゝいふる義ら同ものうゝしいふの裏と古歌ら所ゝ〳〵と云る岩ゝの苦屋ゝみ

みわすれたるさまとするみゝ叶同心とをゝれるゝ岩ゝ〳〵

西行ら詩を〳〵たり西行上人の歌といてゝされど山家集等ら集まる

見ゝ所ゝ〳〵ゝ西上人の清水ハ吉野にみ家集に入ゝ

すゝやまゝ〳〵ゝ人ゝ〳〵ゝ赤ゝたる心の井ゝ〳〵ゝ一覧ら小堀

宗甫君芳墨あるべしとて西行の旧庵を尋ねかりて茶入れつる
その所に銘して前のごとくの歌をよみ給へるとも書きつけて
の侍れの名付けてしかるべし

さる昔住吉人の弟子心なく住なれ侍りて
ふるみ果てる初すきを外れ　持佛一間にて
隔て夜のおはさむへきやなといさとうち
うつ

さる六月の上に云云去る月云云字も通ずる將の字
を用ひ弟子八格別なられと云意也昔住吉人と八幻住老人
を云たるなるもなり云云心なるきも秋の為八夜具を云

さ法と筑紫言良山の僧正加茂乃甲斐行
うつる巖子ふて什ふ洛ふのほいはそう
市る城ある人をして額をもいやもくと
芽と体て幻住庵の三字を遣ふ所也
そ乃庵乃記念なり

さる城八左馬よてみるるといふ義也さ行るの略語也去の字よ
八あ八八筑紫高良山八筑後御井郡玉垂宮にて武内大臣を
祭るとゝや天台宗にして僧正諱八一如と云加茂の祠官藤木
甲斐守敦直の子也敦真書法三跡を宗として空海法を伝ふ
慶長寛永の間の人なる書法特輩よ超出して名家なり

生る者多〻子孫モ書法を傳受して入木の一家世ニ甲斐
流と称す北向雲竹佐々木志津摩など門人ども他門人数百
人頗る世ニ聞るもの多〻略す嚴子ハ出所未詳孝経に嚴
父嚴兄ハたゞ子字文ハ父に資て君につかふいとゞ嚴と敬
といふ又茶邦にて稱美の詞にいつくしきといつくしきハいつく
しき又〻淡路と云説なれど從ひがたし文勢語路漢音に淡ま
ハ章をなさず妄ま文字を作りて亟ゑ不何ぶれハ宣て而見
なりて書きたる歟いまそかゝるとハ在といふる額ハ槻
木に彫たり今江州台禁の能士千當不持とる

すゑて山居といひ孤寢と云ふる器也

ひふゑ〻ゑ〻ゑ〻ゑ〻ゑ〻木皆ゆ拾豆哉乃芳墓
汁枕の上乃柱ふ勢〻〻〻

さるうつはたゞいふゑ〻ゑ〻ゑ〻ゑ〻ハ宮のさるハさゝたるをせるとこ
の俗語さまで見ぞいふゑき道をたゞなと貯ふゑき
なゝたゞ木皆の拾豆哉の芳なめと書く文

豆と稀〻と如〻ふ人〻ふ心伐動ゝ〻ふ家
なの箱里乃れのこれ入来ゆていのもの稲
ゝゝあゝ〻宛の豆物ゆらよふなゆ系ゆもの
ぬ農詠日既ゆ山乃端ふかく亟と扶世哉

ふ月ぬ待てハ新たを侍ひ

ゑハ心を動し故ハあるふゝ文勢語気妙境たり古文前集
雲谷雑詠朱晦菴野人載酒来農談日已々此意良已勤
感歎情何極帰去莫頻来林深山路黒詩句を取る
欽唐詩に夜坐不厭江上月晝行不厭江上山といふ伊も
なるべし

飽を取てハ閑雨ふ竟非ぬこゝすこのゝいゝハと
てひゝ妙まふ閑寂を好ゝ山野を跡をか
くさゝ舞とてハ行のゝ

莊子齊物論に因兩問景曰曩子行今子止曩子坐今
子起云云口義因兩影邊之淡薄者云云是即是非待彼
之喩也ひゝ妙るふゝハひゝすゝゝ云に同ゝ妙す横音の通形
俗よむゝむきにちがいゝる義ゝ閑寂ハゝの都よさゝゝまゝるゝ
先ゝ以下の文ハ才のつゝなる式演るゝ家に祖公の清潔の俳
腸を味ふゝゝゝの志のゝるゝ生る文ゝ

やゝ病ん人ハ健て世をいゝひゝ人ふ忙ゝ

やゝハ家ふハ動の字の義すゝて公ゝもとれハと云るゝ翁謙
退ゝて信実の隠遁れハたゝゝゝ山ゝ世をいゝひゝ人ふ
似ゝゝゝゝふ所妙意なるゝ

倩年月の移こし拙き才乃科を知らふ
ふある時に仕官免命の地にうゝやみ一
さゝハ佛籬祖室乃龕に入られ侍り

倩ハこれかゝ白くさゝと思ふてもふゝ本字ハ熟思の字なる事まれ
ハつゝゝゝいふとゝハ切りふゝ文ざれハ文義をなさぬとも事〳〵とゝ
なぐゝ俗語は同〳〵拙きしハ不器用なのといふは同〳〵科とハ品くゝ
云義ゝ仕官縣命の地をゝゝやゝゝハ君に仕へて知行俸禄の人はま
さゝんるを新ふ義ゝ免命の地のるハ国史諸書にゝつゝり武家評
林義家鎮守府將軍宣旨受て永保三年六月奥州へ下向の時安
倍宗任をハ召連さるるを宗任は示されるる條は但〳〵義家ゝ心
に於て自めゝ汝ゝ胸中を疑て勅云ふハ非す唯世の人口を思ふが
怒られを依て先立て奏聞を経て筑紫の松浦乃内に汝ゝ一所
懸命の地を申賜ハりぬ早く彼處に下て領知せ我〳〵と宣ふ
ゝゝハゝゝ佛籬祖室ハ六祖恵能禅師語録云吾三十而窺佛
籬祖室と云るゝゝゝて翁深川長慶寺佛頂禅師に参禅して
既に僧侶となんとせ丸〳〵を云拙き才の光を極ゝ品くの志
を発〳〵て果さゞるゝを憂る文ゝ

ちるゝ花ゝ風ゝ雲ゝ才をせめ花鳥は情に
労〳〵て皆くゝ世渡のたゝとさくゝなれと
強ふ事能ゝ成ゝ一節をつなゝる

句陰ハ俳諧ハ生涯を孫るるを演うるなりいたづら
始むるなりもなるなりと云ふ義元俗をいへるなかるべしと
なるべし　されば行脚の義なる故て元花をるに情を
なして俳諧乃風情を元風を花をるとでけるなづけの文
章元句一節と云ふ者尾をくるる一節ハ俳諧をなるを

樂天ハ五臓乃神成やぶり老杜ハ痩せ
賢愚文質乃ひとしくさるもいつきう幻
の栖をくすやとみりゐ拾て姉ゝ

樂天ハ五臓の神を成るとハ元稹寄樂天詩老逢佳景
惟惆悵所地各傷無限神ヲ句より出るなり樂天ハ白氏
名ハ居易といふ神ハ魂のなり老杜ハ痩せるとハ李白贈杜甫
詩飯顆山前逢杜甫頭載笠子日阜午為問緣何太
瘦生只為從前作詩苦句より生るなり　老杜ハ杜
甫なるにして字ハ子美と云賢愚文質のひとしくさるとハ
白樂天杜子美を賢と指し自らを愚と云意元彼も素も共
に風景自然五臓の神をいとあ又ハ痩せ皆を好る癖ハ
して同一地元ひ賢愚文質の不ひとしかれ遠てといふも
文ハたのやかざり質ハまぢのなりて白杜を文とし已を質
とし　なるさまハ句世の中を皆いつれも賢愚の差別なく
幻の栖をうと勘破して果ハ一塊の塚となるより外なし
空ふ幻住菴といへるを拾て記尾の一句元妙く宜の景

色より月の景色まうつり今宵にみりん拾て如一ぬ〻夢を
ゑがゝれしゝ七情の感動も強ふ美幻の境界ゆゑて本来
空よ為ものの時賢愚文質一物もなる事〻されもみりん拾
さうぬゝいふ本来空よ帰ものの付をゝ〻ゆゑ味ひへ

先為のむ樫ゆ木もみる友 木立

ゝ氏菴の傍よ椎の大木なりゝ〻ゝ〻ゝんよつて什吟を西行上人宗
集よへ〻ゝ〻ゝみて友をゝれきぬふ樫のねゝ〻にゝのむ樫の下枝
ゝよゝれ〻〻歌をつゝゝての作ゝゝちゝれたり一説よ原氏拘語推ゝ年
の同〻歌ゝとつゝたるちりゝいつゝれゝなれる住居のゝ毋
のげゝゝのゝ〻椎ゝ年ゝいつるふよりなるやうちれ〻述懐の哥よ
〻てゝゝゝ下の句いゝに通ふ為〻ゝ為〻ゝ西上人の歌ハ異ゝ樫て如
〻ぬゝゝゝふ得なりて探ゝ〻ふ形むゝゝふ意も詞も通ゝたりまて
山家集信仰の翁一世の作ゝゝゝてゝゝやゝゝ祀乃歌句ゝれゝよ
〻味ゝて俳諧文章の亀鑑深妙の意趣考〻探る為〻一新よ
剛決〻て祖翁を貶ゝるゝゝれゝ成る而已又萬葉集第七詠
崗歌ゝへ片岡の付むゝつをふ拾ゝゝ今年のゝゝ新ゝちりなん

題芭蕉翁國分山幻住菴記之後

何世無隱士以心隱爲賢也何處無山川風景
因人美也間讀芭蕉翁幻住菴記乃識其賢且
知山川得其人而益美矣可謂人與山川共相

得焉延作鄙章一篇歌之曰
琶邑湖南兮國分嶺
古松鬱兮緑陰清
茅屋竹椽纔數間
内有佳人獨養生
満口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古富勝覧
今日因君尚益榮
元禄庚午仲秋日

震軒具艸

元禄庚午ハ三年也翁幻住庵に住給ふ年のことも震軒ハ丈艸か号なりといへりいかにも其明説を見ず又伊勢松坂の儒者龍尚舎晨風か号なりともいふ人ありといへり晨風ハ蕉翁の知己にしてなる年経隆て遊ぶ附紀の名をなんもふなりの家集などいへる吟なり伊勢外宮祠官龍貞か撰する伊勢名所拾遺集漢字の序ハ晨風か文也延宝年中の撰也又按するに易ニ震為雷為龍云ッ縁ヲ因て龍尚舎の号もなる也丈艸も龍か国に住し時なれハ縁なる名乎将ハまた佛幻菴ハいとなからぬ前也又丈艸漢字の跋に風狂野衲丈艸とのミ書たるまでにして記後の詩に震軒と書る名乎やあやしむへきも石川丈山の風を慕ひて自ら丈艸と称せしなれハ詩草にハまして丈艸と書ありしを他日の考をと俟なり

几右日記

以下幻住庵の日記すべて自ら書くべし
しかるを机の脇に向のごとくしるす人
几右ふれ行まづその右
机の脇しるす義心以下皆幻住庵

時雨 脊中見てやる 林屏 曲水

雨ふり山の眼前即興すべし
きり翁の雪体にして峯より里へ降る杜宇乃山の林屏を
るのいぶ山より徐むる脊中の足る尋常の空より足る時
時移りて一村の姿情山居向上の気情あるべ

くれさまより路ふつる也乃山 野水

くれさまは翁の嘆ずるを云ふ詩人の住居を云ふ
高木立の下閑に閑居の姿情言外に異ひやらるべ

雑 もるるくれ時 雑なく 去来

幻住庵は曙の雨霧を見てその作ふるれ多くるなれは水霧と
かくより外に向にしてけれ時ぶ雨霧のなるあ
中四るを初八里ふ八定めて雑のみれるるらんといふる高ふ
してさるる時八雑のみれ時ふれ時をいふ

海山ふ五月雨や一くらく 几兆

雨ふ山より湖水を眼下よ見おろす西へ海山とハ一眼の境へ

青白さふと八月白の俤とさるさまを云へ一とくさくさくハ元と
くふやくふりたるといふ義ハ山より出るまみぶれもの霞ひか
ゝて俤とする風情眼前の実景たる事

軒ちかき岩梨おるれ精のあ　千那

岩梨と者の梨より八花咲る頃ゝよりてみなの実をす
こもの軒端近く咲るを賞する句にて山居なれハ
と物と果る事ゝまれハ殆おもと精ふ下知して岩梨のもを
賞美せゝ句ハ光亦菴の傍にたゝ木とられゝ

細脛のやまめ乾よやや夏のやま　珎碩

幻住菴を行ふて閑寂を楽ゝ事ふハ空庭竟の山居ふて志
ふも閑れ眺望浮風を得て暮を忘れ祥と信ふ事ふ勝地へと
いふを一句ふ〳〵ふ面白ふ言外ふ味ふ事ふ
ゝ是を休めふすと最上の不ことといふ意ハ

贈紙帳ヲ　野徑

おりふる我帳ふ仏ゝ送ふ

山居一紙帳を贈りゝ句ふて思ふ事ふ仏紙帳ハ生ふ身ふ
ゝさゝ我風雅の誠向ふ方のまた生ふ身ふ事ふ意ふて
贈りふ事と敬句と無ふふ風騒感ふる俳ふ言外
の志情殊味ふ事ゝ

い川しきて露の葉ふりるおもかげ　里東

幻住菴獨居の風情ありけるにや句にしていつきてといふの
日に焼(タキ)てといへる歌に閑寂のおもむきあるものを学ぶ
様まじあれは椎の葉ふくといへるは実にも旅寝のなかにや山
居ありし事ども露のかぶと将し又夜雪を指しるひかりおぶく
とは佛(ブ)借(ヨリ)の今関東にてたぶさといふさくめ吉将の又もと
いへるをかぶらは上のいふなきてのうつかるまにそへともある事し
さまに紫竹門にて偶休する大廻しと云事なとを是翁のこととも
とおあやうにおぼへしめる姿情言外にあふをたり再三
吟じて味ふ事し

堂も見かしこげの露　乙劦

山居茅屋の風情たる事し堂の風にさらされて菴のうち
状も見る様様見ても昔の跡の哀しきさまに興ある云意

顔や葎乃中かなむらつき　膳所　怒誰

顔(カンバセ)とは翁を稱誉するの事にして其風雅の表顕(アラハ)なる
所をさして云花うつぎといへる所は翁をたとへたるなり葎とは
おもむく事など事のある中にと云事にて庸人不風雅の人々多
きは葎のしげりたるかぬし其中に格外の高風人を勝れたるを
といへるをなむ空木にたとへて稱美せし句なりとす事し

あらくし峯に下りたく五月雲　探志

あらくしくしハ行に危く覚束なきさまを云ふもどろもど
ろなど云も覚束なきてゐまして同義なる故し又俗にもど
どりどりするなど云を然ふりてたどくしといへる意に皆通ず
もどりどくハろ峯にも省きたるといつまも踏なやむさまをいふ
事して我の覚束なくやさしくせみをに見てゐるを然ふもたどく
又たどるなどハ尋りて然ふに計り有る様に覚へらる文字ハ
躊躇の字を見て万葉集にハたづくしとよみりツト通音之
源氏空蝉湖月抄の引歌に夕闇ハ道たどくし月まちてかへれ
我背子その間にも見んといふ歌の意なやらく覚束なくして何をも
なやむさみとハすぎなる五月も降りまして餘の月よりハ殊に
深雲なる皐月闇と云ふも降らる故翁の字で山路
を下ゆくさまひて何をとのふらんとハたどくしくなやうさまを
ざられハ空の晴るを待て行のたどくしといへる句なる
歌し月まちて歌せこといへる歌を底意に含みて彼と覚え
骨を換ゆる手つ雨雲や又五月雲ハ下雲と同し意にて樹木
の茂りて陰くしたるをいふといへされと木下闇ハ四月の季之

五羽六羽庵よりまハすしぐこる　元志

しくこるハ多識篇に説かれハ略す此しこるといふハ寂莫の躰
を形容せるなれハ此幻住庵山居の閑寂ハ稍をつゝむに猿

の影茅に木をきる斧の音ともむすぶ人と棲くまれ一羽二羽のうぐいすにはあくるに山ぶかみ羽音をもうまいしてゐるにてやなるうんあもあ林しの香りやと云意

木つきにつくまて鳴る杉垣　膳所　泥土

あはれ鶏の林しき音ハ啄木鳥の森しきかでへてふくつまぐ〳〵叩くを取合せて淋しく鳴るを云不一句の元旦引

笠あふり柱すゝ　や風乃色　史邦

記中に書る本当の柊笠哉の蓑蓑計枕の上の柱すゝ無さいふるさとあにしてい笠たのふへとハたのふぐ寒さいふるまして俗ふあをるを云義に涼しや風の色とハ翁の清貧志の侘寂たる節の心を形容して化れるに以下涼しといふ句ともな翁の清潔の気性を餘情よきして云ふ句

月待や海を風月ふ夕すゝ　正秀

玉分心よりの眺望眼前の実景言外見るるめり風月を云不出の場に

ちつうさハ栗乃葉沈むされる　七人　柳陰

閑寂の栖居かなふ流る清水よ木の葉の沈むさみ都

閑の地実情見牛一の句に

涼しさやそもに米うむ稗うむ　如行

清貧の閑寂を好む而言外よりて如行たゞ尋仿ふて
世を清潔を悦ふの意句外よりなつかれたり米うむとは
つ閑の而すして実ふ居て虚よ働くの場稗うむとは幻住庵を動く

訪ふ留主なり

椎の木をゝうゝて蝉や鳴　膳所　朴水

訪ふ翁の留守なりけるかゝ句作なり見達ざるを欲く情を
外よりすつり已を悔ふ啓諭してのみつはも

同じ下や先妙祖子法涼し　美濃密井　市隠

先ふ開祖耶金の眼下よ迫くはを見るを法ふ計ふ異なる
形容してみるの以来る風弾ふ涼しとせし句に

文ふ云ふす

稲所米や早苗の数ケ夕涼　半殘

膳所を古へ御料を供しる不ある処の名にかやされれたるの
ふ演にも云しよりしよつて膳不米とてるの土地の者ハ上米と存
ふとなんそハとるかくも句意ハ玉分山より猶不乃向をそたるす風
景さや物ふ生る稲業も言るようなるむれをいまゞ早苗のなけ

汁よまさこ流して夕景色はさも涼しくも感ぜらるる意も
とゝめ〳〵伊賀の守殘り許り文よ云ふす句みて空て
まもなりぬ夏ゝ風景を云ふ〳〵たる之稻の田やとせゝよ稻
穂うる夏ゝと稻の米ゝ〳〵る所ふとる涼まして早稻ハゝや花も
ゐる七月末の頃とハまたく秋暑の句とハすれゝ稻理を持
て一句の手際味ふべし

麥乃穂を出産す

一袋これや鳥羽田のこゝ〳〵麥　之道

麥の穂ハたゝられゝ云ふ所なれてハこがゝと云田麥ハ稻を刈なてゝ後を
出ふこゝ〳〵ねを云く上ゝ名吐を付て麥ゐる穂ハ菜種をも他る歌
吐ゝ〳〵ゝ土地ゝハつゝゝ〳〵ゝゝや付句ハ古今集一聞の歌なれは異伝
山〳〵のゝゝゝあ〳〵こゝ〳〵歌のゝ〳〵我て付歌を持て一袋やゝ〳〵ふやゝれ
ハ歌段の之道ゝ土産年山伴紀伊郡鳥羽田の野麥の穂ゝハ考へ出て
麥の穂を出産ゝて句の産意ゝ歌のゝる羽ゝ麥ゝ〳〵ゝ人ゝゝ〳〵ゝを持ち
てゝる羽田のゝゝ〳〵麥を一袋おゝ年て産尽ゝゝ云意を含ゝふつ
ゐゝと味ふべし

書音

一箕ゝ入る山さハゝり屋や振ふすき　長崎　魯町

書音ゝゝ〳〵ゝハ文の使ゝゝゝゝゝゝて長崎の魯町ゝ翁
を思ひ出て作ゝゝゝ一箕ゝハ四月十五日を結箕ゝ七月

十五日と解釈して安居九十日といへるみ義百日といふ五
さいさいはゞ計こゝろ句意一文九旬入の山住ハ老の信
侶よせばこゝろ寄もたるゝ菊九かゝて接穂ずきの菊九十日
百日の間ハ花ゆゑ異ものゝ推して中せり句心

夕立や拵木の臭ひ一ぱい　及肩

臭ハかざ〳〵傳聞〳〵句意の山のもとを通る木ゝ山ハ拵木多きゆゑ
ゆ影化り〳〵ちる句〳〵拵木のかざハ新句みて魂の抜ひとゝきさ
ゝ化の皆ゆゑて働きも

舞ル猿腰掛ニ　舞當作
舞

記中ゆいる所のゝ名ゆゑて彼猿の腰掛と名付し松の枝化りゆ
登りて四方を眺めゝて行社風ハたるかゝ山の窪ゝより吹起るちる
句〳〵句作まる言外の風景行ける句〳〵

贈蓑ニ

ちゝ〳〵ゝ雨降るゝ蓑みのゝ蓑笠　北枝

加賀の北枝ゝ例の名だゝる蓑を翁一送り誠ゝ文ハ書ゝく
なる句ちる句〳〵句意ハちゝ〳〵雨もまぐちゝ雨彩蓑を送り
らゝるちれゝ行蓑のゝ蓑ハ接好の翁の背ハ負ひ分ゝ

何ぞの果みゝ打ぬらんと書きるゆゑ
すゝきめたるみゝ〻に果何のゆゑ
なれとひゞくるゆゑ

木履ぬゝ傍ゝ生りし蓼乃花　木節

山居眼前実景云々〻俗言ハ幻住庵のゝ名きもの
みりゝゝゝゝ又菊山上ゝ下話ゝゝ癖ゝゝゝ探志ゝ白にてもきる
ゝ南史謝霊運尋山陟嶺必造幽峻登躡常著木屐云同
一致たるゆゑ

包紙ゝ書

猶ふこす茶袋や　世話乃雪　膳所　扇

句ハ猶ゝの扇ゝ茶袋を猶にきりなるゝゝ包紙ゝ書分て為乃
りゝおこせゝゝ萩の家と号る和尚候採嵯の坊ゝ太平記直義伊賀
の茶ゝ云々玄恵法師老病ゝ犯されて寄りゝゝ乃ハ茶を一包送ゝ
て其つゝゝ紙ゝ歌ゝゝゝて同ゝゝ母ゝ君ゝゝ今ゝゝ
なゝ世ゝゝゝゝる乃流ハ古今同情ゝゝゝ

稲の花こと式佛乃　土芳　一の孔　智月

茶を菩薩ゝ云るに取てこれ生涯の常食一日も欠ゝ可ゝ法
の乃を一日たりとも欠ゝるゝゝゝゝゝゝ乃ハ生涯をたのむ指を以て二世
たの乃佛ゝ土芳ゝこの句ゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ又佛ゝハ
菊をゝて作りゝゝゝ菊にすゝ来るゝゝ深ゝ言ゝゝゝ情言

外ヨリ時々ノ秋ノ音ヲ聞クモ寂シ　日暮ル四人ノ四高楼ヨリ

石山やいりて果てし秋の風　羽紅

石山の石より白し秋の風　北枝

牛ニて扨ハ石山へ行ントスルモ秋風ノ風情ヲ富ミ果ヤラントイフル句ニテ石山ノ美ヲ山ニカキ尽サンタリ　ナル趣ヲ見テ石山ヲ秋風ニ結ブ所ヲ翁ノ吟ヲ解シ得テ後ニ見ル句

梅の塢やきれて明る夜むまりくさ　昌房

閑寂山居ノ趣ヲ作ラルル句ニ言外ノ味ヒ多シ

里ハいよ夕めしどきかあつさゞ　何処

里ニ今夕めし時ノ物ヒナツカシキ山居ニイフニモ深ク住ミナレイフル句ニ言外深シ　我ニ一年化ル句ニ味ヒ

嵯やいく度ふみ分て蝉の声　越人

元ヨリ閑寂ヲ探リ求ル句ニテ清ハ日用ノ事ノ中ニ清ヲ求ル林ノ底意ナルモノナレハ蝉ヲ山居獨住ノ友トスル句ニテ是ニ比スルハ又一段ノ林ノ清ヲ深クシテ句作リイヒノ多ク竜ノ如クナレハ場所ニ応ジ句

越人と同じく訪合て

蓮の実や供ふ老入庵うち　等哉

老入庵に京不字眼すして蓮のうみ老を供ふよしいふ
越人と同じくこいふる句を始まくら

明年弥生尋旧庵

春雨やあらしも果す戸のひつを　嵐蘭

此年弥生八元禄四年の三月なるべし庵をなつかしうして見るべき時の句にして実雨の降るを嵐を
を帯て花をげしき山の香りよしとも物り住ふふるめれ日を

の人すたのふいと一月も住うるべき此菊の居迷心一枝を慕ハ
きと言ふまるを情ずへ嵐もいすゝ果ずみ吹さるるまれを雨戸
も并くよりハひつ孫くして去年の秋住すふハ学べ尽を言句
ちう仮枕てくふる宿を求てうれハ忘れ一まるるるさく
はれつをハ歌の情すて仮枕一宿を辛強て日るるる乞此句ハ
去年のうを住枕すふを日る足てみ住てて戸のひづをを一四言
外の情味ふ分一

同暮

涼しさや竹を伐ては住枕一　曽良

嵐蘭ら尋一年此方曽良ひ来るての見涼一さやハ菊の心乃

序しさ小説家さし翁の能弱向上すり行計の屋竟の勝地
をも心ふ着(チャク)せ[illegible]ぬ[illegible]み作[illegible]の[illegible]ハ翁く深し〳〵際(サヤヨ)さ
心情ゑれと称美ち〳〵句意言外ま〳〵ら[illegible]花葉ゝ句情〳〵曾
良ゝ句意〳〵表意なりて[illegible]る所一致(イッチ)〳〵情少[illegible]

跋

跋ハキビストイフ一ニノ玉篇ニ引テ詳校篇海ヲ云足ノ
後ヲ為スト跋ト故ニ書ヲ文字ニ後ニ曰レ跋ト

猿簑者芭蕉翁滑稽(ケイ)之首(シュ)謔(キヤウ)也

按スルニ滑稽ハ古ヘ酒器ノ名〳〵漢以後洒落ヲ以テ君長ヲ諷
諭スルヲ滑稽ト云後世是ヲ俳諧ト云史記索隠ニ姚察(カ)云
滑稽猶俳諧ト當今蕉翁俳諧ノ名益〳〵コレニ本ケリ
サレバ俳句ハ人ヲモ諷諭シ已レガ心ヲモ正シ意ヲモ誠ニスル
ノ一助ニ晋子カ序文ニ五徳ハ云ニ及ハズ心ヲコラスベキタシナ
ミナリト云ヘルニテモ知ルベシ今コヽニ俳諧ト云ズシテ滑稽ト書
シハ其名古ニシテ且ツ正シキヲ以テ〳〵吾邦吟詠ニ俳諧体
ト名ツケシハ貫之カ古今集ヲ權輿トスサレ𪜈今流布ノ

本ニハ誹諧ト書ス故ニ歌人ハ惣テ言偏ニ从フ宗鑑真徳
宗因ハ連歌ノ俳諧体ナル故ニ亦從テ言偏ヲ用ユルニ言ニ
从フトキハ誹謗ノ誹ニノソシルト云フニ字彙ニ芳微切音飛
也人篇ニ作ルトキハ皮皆切雜戯也音佩故ニ諸説紛々トメ
或ハ貫之カ書風凡ニアラザルヨリシテ草書ノ言人ノ篇畫
マギレヤスキユヘ人篇ヲ言篇ト見誤リタルヨリ流布ノ本ニ
言篇ニ書タルナド云リイカニモサ思ハルヽナルニハヤク唐土人
モ誤タリト思ハルソハ隋書巻五十八陸爽傳ニ云好テ為ス誹諧雜説ヲ
又柳顧言傳ニ應荅如響性又嗜酒ヲ言ト雜ニ誹諧ヲト見ヘ
タリコレニ據トキハ和漢古ク誤リ混ノ通用セレナレバ深ク
尤ムベカラズ或人祖翁ニ此ヲ問フ翁荅テ曰ク言篇人篇ノ
説多シトイヘ𪜈我ハ人篇ノ方ニ書馴レタレバ筆癖トナリテ人篇
ノ方ヲ多ク用ユルニ深キ意ハ知ラズト申サレタルハ難有一言ニ
首ハ直也説文疏云直者正也言首ハ為一体之正韻ハ
与響音同實ノ而精者ヲ曰聲ト朴ノ而浮者ヲ曰響トサレバコ
ニハ俳諧ノ正風吟聲ト云義ニ声ノ物ニ應ズルヲ響音ト云
吟句モ各ク吟シ出シテ人ノ耳ニフレルトキ則チ響ニ首ヲ初ト
解スハ非也

非ス比スルニ彼ノ山ニ寺ニ偸スミ衣ヲ朝ニ市ニ頂イタダク冠ヲ笑ニ只任マカス心ニ感
物ニシテ寫ニシテ興ヲ而ノミ已矣

清正記古記寛文三年刊行 橋清介氏保書 云清正或時
伏見ニテ論語ニ手ヅカラ朱引ヲ致シ給フヲ子飼

ノ猿ガ常ク傍ニ居テツクくト見ケルガ清正用有テ立レ
タル跡ニテ此猿筆ニ朱ヲ付論語ニメタト塗付タルヲ見
玉ヒテ上古ヨリ猿ハ見ルヿヲ学ト見ヘタリ昔シアル僧終
南山ニ隠ル時ニ袈裟ヲ失フニ猿コレヲ盗ミ其身ニ着テ
岩上ニ坐禪ス羣猿コレニ效テ坐禪スコノ猿タハフレニ袈裟
ヲカケ人マ子ニ坐禪シタレヒ其功德ニヨリテ成佛シタルト
キケバコノ猿モワルサニ論語ニ朱ヲ付タレヒ少シハ聖人ノ道
ニ叶フベキト宣テ一笑シ玉フト云く是等ノ事ヲ取テ書シ
ナルベシソハ清正唐宣宗ノ古事ヲ記臆セラレテ申サレタ
ルナルベシ林間録ニ云唐宣宗甲戌大中八年終南山ニ初
メ一僧アリ菴ヲ結テ定ヲ習フ一日猿アリ其仰黎衣ヲ
袈裟ノヿ也竊被テ安坐ス群猿有ニ隨テ皆定坐ヲ習フ脱去スル
者アリ今五彌猴ノ塔アリ至元宣宗御製ノ讃アリ略之余未
見林間録全書故ニ文章違誤アルベシ追テ正スベシ隨齋成美
ハ古今著聞集巻之二十ニ馬ヲ竊ミ來レル猿ノコナルベキヤト云ヘヒ
穏當ナラズ又佛説獅子月本生経ノ猿ノ因縁ヒト事ハ法苑珠林ニ見ヘタリ云者
アレド穏カナラズ前漢書五被傳ニ云以為漢庭公卿列侯皆如沐
猴而冠耳コノ故事ヨリ出タリ一轉作ノ文ト知ルベシ朝ハ朝庭
ヲ云市ハ人ノアツマルヲ云人ノ多クアツマリテ商賈スル処ヲ云又
小補韻會ニハ朝時而市スルヲ朝市ト云ルハ爰ノ意ニハ違フ
ニヤ又項羽本紀ノ楚人沐猴而冠スルト云ヲ取レリト云リイ
ヅレ是等ノ故事ヲ取テ書タルモノト知ルベシ非比笑トハサヤ

ウノ戯言アルヒハ笑話ニ似セテシタルヿデハナイ只心ノ物ニフレテ感動シ興ヲ起シ事情ヲウツシナスノミノヿト云義ニ譬ハ初時雨ノ寒キニ伊賀ノ山中ニ猿モ小簑ヲホシガルベシトセシ姿情ノ処ヲサスナリ詩ノ集註ニ興者先言他物以引起所詠之詞也ト云ニテモ考フベシ詩ノミニアラズ俳句ノ上ニテモ亦多クアルヿ猿簑ノ句ハ即チ興ニ

洛下ノ逸人凡兆去来隨翁遊學棋館竹窓躑躅等凌節斯有歳

洛下ト ハ唐土ノ京師ヲ洛陽ト云ソハ洛水ニ因テ名ツケシヿソレニ比シテ吾邦ニテモ文人騒客洛陽ト云洛陽城下ト云ノ意ニ逸ハ逃ニ世ヲノガルヽトイヘル義ニヌ凡兆ハ醫ニ逃レ去来モ此時既ニ致仕セシヿ故ニ逸人ト云ヿ去来ト凡兆ト ハ俳位五六等ヲ隔テリサレハ去来ヲ以テ上トスベシ故ニ其角カ序ニハ去来凡兆ト書リ文艸爰ニ凡兆ヲ以テ上ニ出スハ凡兆ハ疎ク去来ハモトヨリノチナミラカシ文ニ親シキヲ後ニシタルヿ信義ヲ以テスルガ故ニ等ヲコエルト ハ棋館ト云フ受テ云ヿ梅品ソノ品種多キニヨツテ云ヿ節ヲ凌ト ハ竹窓ニ對シテ云ヿ竹ハ其程くニ節鄂アリテコエガタキヲ云ヿ言ハ難キヲ勤メルノ義ニ取タルヿト知ルベシ

屬撰此ノ集玩弄無已自謂絶超狐腋ノ白裘者也

屬ハ近者ヿコノゴロト讀ベシ玩弄ハモテアソブト云フヿ珍重シテ朝ニ讀ミ暮ニ誦シテ熟ヨク旨スルト云義ヿ狐腋ノ白裘ハ孟嘗君ノ故

事ゝ王褒講德論ニ千金之裘ハ非一狐之腋也又孟嘗君
ガ傳ニ狐白裘ト見ヘタリ是ハ狐ノ腋ノ下ノ白キ処バカリヲ造リ
タル裘ノヿニシテ世ニ得難キモノトス因テ千金ノ裘ト云ゝ絶超トハソ
ノ千金ノ狐白裘ニモハルカニコエマサリタル珍重スベキモノゝト思フト云義
ゝ

於是四方嗤友憧々往来或千里寄書書中皆有佳句日蘊月隆各程文章

易云憧々往来朋從爾思憧々ハ人ノツラナリテ往来ノタヘザル
貌ヲ云詩大雅雲漢云蘊隆蟲々蘊ハ聚ゝ隆ハ盛ゝ四方ノ吟友
ヨリ来ル句ドモヨク〻積リアツマリ月々ニサカンニナリタリト云ル
義ゝサカンナリトハ多キト云ル意ゝ禮記ノ註ニ隆猶多也ト見ヘ
タリ程ハ說文ニ品也ト云リ又文中子孝宣章ニ程核名實ト云ルナドド
ミナ品々ト云ル義ニノコ〻ニ六各々句々文章ノアヤカザリ一様ニアラズ
シテミナ區々ゝト云意也

然有昆仲騷士不集録者索居竄栖為難通信

昆ハ兄也コノカミト云ヿゝ仲ハ次也俗ニナカアニト云ニ同シ丈
艸ヲノレヲ末子ニ準シ已レヨリ長ゼルモノヲサシテ云意也
伯仲ト云モ同義ゝ兄ヲ伯ト云ト字彙ニ見ヘタリ同門ノ俳
友ハ弟子兄弟ナレハ丈艸謙讓シテ此集ニ洩レタル素堂支考許
六ガ輩ヲサシテ已レヨリ長タルモノトスルノ意ゝ騷士ハ說文ニ今謂詩人
為騷人是ニ倣フテ又俳士ヲサシテ云ゝ禮記檀弓ニ子夏ガ語ニ吾

離群而索居亦已久矣ト見ヘタリ注ニ索ハ散也トアリシカレバ住処
定マラサルノ意ニ散ク〻ニ別レ居ルト云義ニ竄ハ逃匿ノ義ニシテノガレ
カクレテ住ト云義ニ栖ハスミカト訓ズ為難通信トハアチコチニ居住ニ或
ハ隠レスミテ音信ノタヨリモナシガタキ故ニト云意ニ

且有旄倪婦人不琢磨者麤言細語爲吾同志雖無至其域何棄其人乎哉

説文ニ云旄與耄同ヲヒボレト云フニ倪ハ弱小之稱也年老タル人或ハ
少年ノモノ或ハ婦人ト云義ニ旄倪ノ文字ハ孟子ニ見ヘタリ不琢磨
者ト云ハ稽古修行ノナキモノヲ云麤言細語トハ意深カラザルコトバ俗
言方言ノ類ヲ云ヘ東坡全集巻之十四龍尾硯歌ニ麤言細語都不擇春蚓秋蛇隨意畫ト見ヘタリ雖無至其域トハ域ハサカヒト云フ

ニシテ蕉翁ノ俳道ノ深キ處マデハ学ヒ得子ド、云フニ

果分四序作六巻故不遑廣搜他家文林也

果ハ晉語ノ註ニ竟也ト見ヘタリサレバ此集撰終リテト云義ニ四
序トハ四季ヲ云ニ作六巻トハ四季ヲ一巻ツヽニナシ附合ト幻住菴ノ
記トヲ二巻ト分ツニ四維六合ニ準ゼシニヤ廣ハ廣博ノ云ニヒロクアマネ
クト云意ニ他家トハ師家一派ノ外ヲ指テ云ニ貞徳宗因ノ派ナド皆
他家ト云ベシ文林トハ詩人文人ノ多キヲサシテ詩林又ハ文林ナド云ニ
ソレニ倣フテ俳諧ニモ文林トセシニ其他門他家ノ材人ヲ廣クサガシモ
トメルニ暇アラズ故ニ同門中ノ旦暮會同スル輩ノ句ノミヲ書記スルノ
ミ夫レモ文音ノ通シ難キハモラセシト云意ニ前後ノ文ニテ會意スベシ

維耽元禄四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席見需記此吏題書尾

耽ノ字字書ニ見ヘズ按ズルニ昔ハ時ノ古文字ニテ通例ニ昔ヲ耽ト書シ虫ヲ虫ト思ヒテ之ノ字ニ誤寫セシニヤ猶可攷稔ハ古人謂テ一年ヲ為一稔ト取ル穀一熟スル也錫ハ錫杖ノコト僧家ニテハ行脚ニ必ス用ユルヘシサレハ掛錫トハシバラク休ミ又ハ逗留スルコトヲ云ヘ掛トハ置而不用ヒ云ヘ釋氏要覽云遊行僧為飛錫安住僧為掛錫

卒援毫不揣拙庶幾一篋高張有補于詞海漁人云

卒ハ終ヘソコデモツテトウクト云俗諺ニ同シ不揣拙トハ揣ハ度量スルヘ不器用ナルヲモハカラズシテ嗚呼ガマシク書タリト云義ヘ庶幾ハ冀也又尚也コヒネガフト云フヘ俗ニドウゾト心ニ欲スル意ヘ下ノ文ヲウケテ云ヘ高張ハ皇張ト同シ皇ハ大也張ハ夸也一篋ト云ヨリ皇ヲ高ニカエ用ヒルハ洒落也タカクカヽゲテホコリカニスルト云義也詞海ハ詩文章ノオ士古今多ク出テ海水ノ盡ルコトナキガ如シサレバ詞海ト云ヘ俳諧モ又サノ如シ海ト云ヨリ漁人ト云ヘ学フ人ヲ指テ云ナリ徧漁獵百家ナド云ト同意ヘ又一篋高張ト云ル処ハ一網ト云ベキ処ナレドモ猿簑集ノ名ノ縁ニヨリテ首尾ヲクリタル文ユヘ斯ハ洒落シ名ヘト知ルベシ

風狂野衲丈艸漢書

風狂ハ風騒ト云ニ同シ花鳥風月ノ情ニ狂ヒサマヨフモノヘト云義ヘ僧侶自ラ稱シテ野衲ト云卑下ノコトバヘ野ハイヤシト云義也

衲ハ僧衣ヲ云ツヾリ衣ト訓ズ深キ義ハ釋家ニ問テ知ルベシ」漢書ノ二字未詳真名文ナレバトテ漢書ト書タル例ナン疑ラクハ謹ノ字誤寫ニヤ師翁ノ集撰ニ對シテ風狂野衲文艸ト書タレバ謹ノ字タルベシ

正竹書之

正竹名字未詳友竹正竹風竹ナド皆北向八郎右衛門雲竹カ門人ニシテ其比世ニ聞ヘタル輩ゝ此猿簑ハ全部正竹カ淨書也初学ノ俳童ノ乞ニ任セテ諺解シ畢ヌ

文政十一年冬至日脫稿

猿簑ぢうし　巻之七　終

補遺考

○其角ゞ序文のうちにおるる亀記幻術ゝ

他化の二字を以て歌ゝ物語ゝはなぶと例ず他人ゝかきてなぶびゝ例ゞ定まれる書あるゝ例ゞ心ゝ云又ゝの定まりるゝ化（アダ）もあゞるゝゞ云化ゝ歌ゞまゞいふ推てゝる越ゝ爰のなゞみおるる亀記ハ苟且の意ゝいやゝゝもおるる亀記幻術ゝ云ゝ例ゞにてハ漢文乃なつゝひ例ゞなゞにゝ云ゝたるゝと知る例ゞいやゝゝもハ仲卒（ナカツ）苟且（コウシ）の意にゝゝザツトシテ亟意ゝ詞ハなゞゝゝゝて意ハ深キ所あるゝ思ふ例ゞ苟志於仁（モ）ゝどなふ所味ふ例ゞゝまれば僅のゝかりゝめにもおるる例ゞゝ

幻術にあらずやといふ意をさしちがへてあざむくといふ事をもつて
志らもおさる事也幻術にあらずと云意にと思ふ趣しらべられまで
ハ蕉翁の俳句をあげらるるをのせて巻首にかかげたる也門人其角
が師の集乃序にいひてさるる事と書置きや何となれバ祖翁
の俳諧ハ此猿蓑に成熟したるなれバ大切の集なりと云る
なるべし

○五音正字　アイウエオ　かくの如く心得べし

○第二巻冬之部史邦句　膝突

古説に膝突ハ小半畳の縁りつきたるものにて下官なとそその送風
にしいへるハ地下人の大内のすもしねるのつかふるものにして取にたゝんで
膝突ハ今も庭上にて用ひ来ふ所にして大内人ハよく知るなる

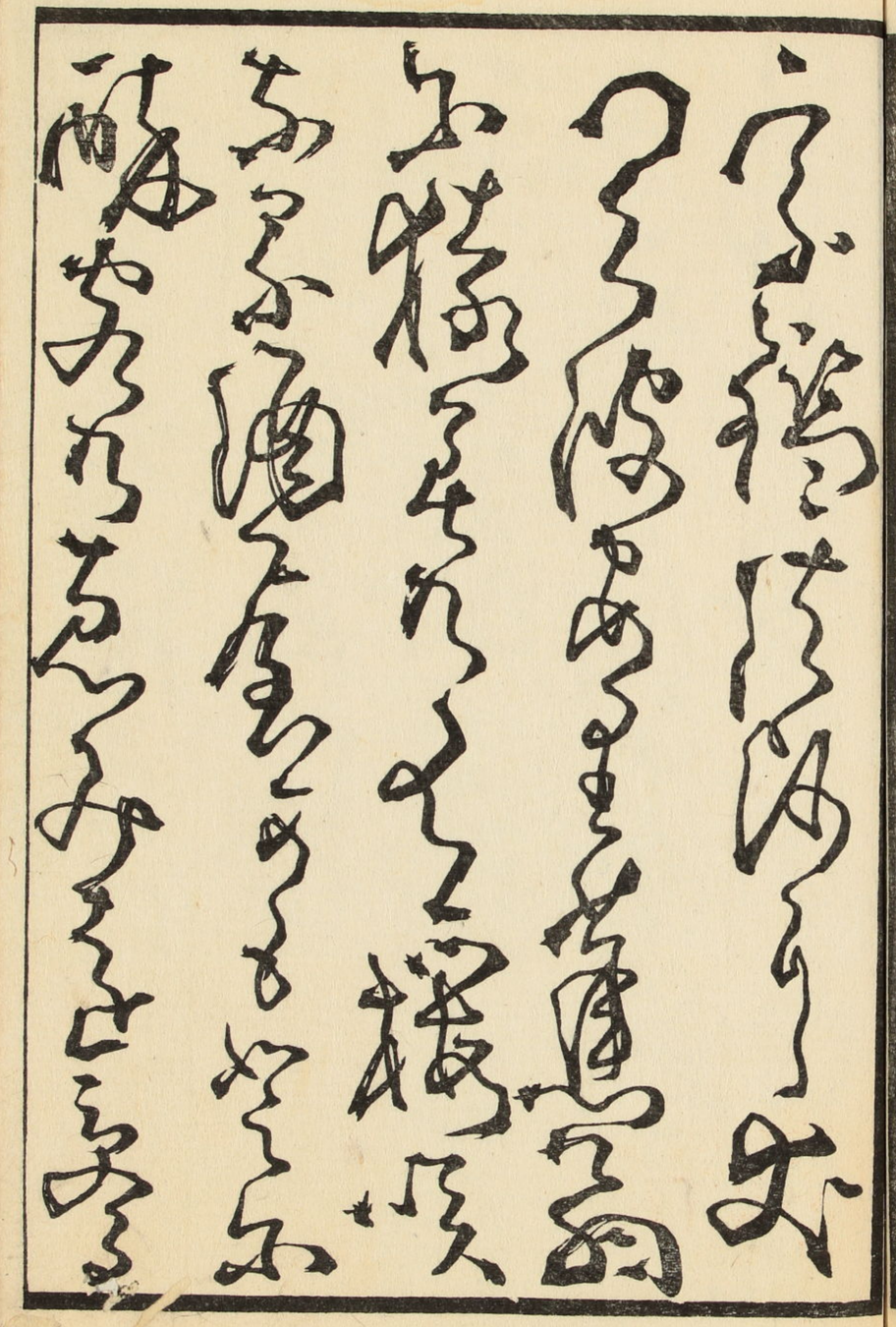
にたとへハ畳の表を八角にして縁の縁を付て大臣以下堂
用ゆるものとぞ殿上ハおのおのいふところいへる古の遺例なる也堂
のゆるも用ゆるにや候ふ砌に候ずといふ府ハ内裏の庭上ハ皆
ものゆるる也に内裏の庭上へ仕候もしくすをいふ也何故に
仕候もしや髣髴として其訳更に白の上にてハしれがたし庭
上なれハ衣の御神楽にても何の面ろや衣の御神楽ハ当時内侍
所の御神楽御分奥行なるものにや是ハ土月庭上にて行ハる
ことなれど支ざし治定すべき証拠なければたしかならず思ふに此
句ハ例の物語めかしを作りたるなるべし猿ハ花咲子春曙抄
七巻にかみのすんじろまつりハかつも立のほそくらあそぶこそたな
ごきめらるれ庭火のふりのおとろへのおりしるにかぐら乃笛ぬ

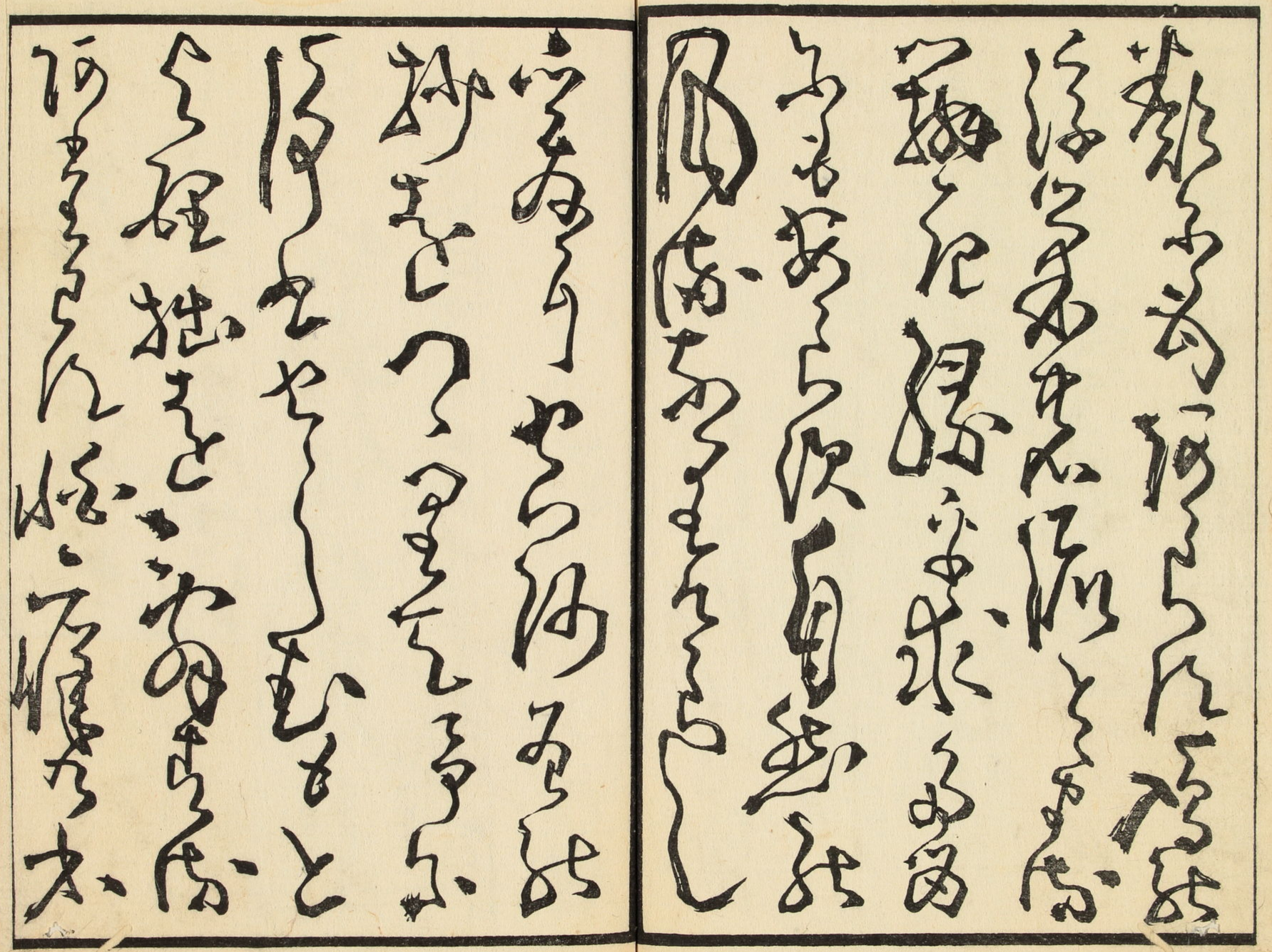
おもしろふあるなきかろふ空すみ〳〵るゝ雲の色もいと〳〵あを
れいこ〳〵おもしろくさまむくはてゝうちくるまあもいと
つめ〳〵ふ扇りゝるまめひゆるもあれへきゝて夜火の傍注ま
主殿以役之立金輪積薪官人着膝突〳〵ゝ弓扇ひかりう
哥の色乃注本末のうさむく日ゝ月ゝ雪ゝ氷ゝ又へたう
このあ徳ゝ扇作ふたゝにさゝゝも狩考ふ翁〳〵

○第四巻秋之部之道句蓋

顧野王玉篇云焦両切乾魚腊源順和名類聚抄云辮色立成
云蓋魚布可居媛反今按未詳これゝる時ハ蓋をふゝ例で
多新撰字鏡以来古〳〵訓やうにて源順乃頃も既に訓の〳〵
ゝてもぞ指ゝるゝや詳ちゝず今按康熙字典に呉地記
ヲ引テ云闔閭入海會風浪糧絶不得渡王拜禱見金
色魚逼而来呉軍取食及帰會群臣思海中所食
魚所曰云暴乾矣素食之甚美因書美下魚蓋字類篇
或作鱶又云音想乾魚腊也これゝよつて考ふるとき八本艸綱
目の李時珍ゝ説に烏賊魚乃名〳〵たるを蓋〳〵云にさゝかふ趣
〳〵呉地記に云所ハ尋常にる魚紀魚ゝ思ゝれぬゝゝれゝの魚
を句ゝ作ゝる魚紀やゝれゝ古来ゝりふゝ訓ゝゝたれハゝ物な
〳〵ゝゝ名にるゝゝ紀理ゝ又作者ゝゝ物ゝ〳〵ゝゝ白化
るゝゝ紀いゝれゝ之道ハ醫酉を業ゝゝゝれハ本艸綱目ゝゝ
ゝゝ紀ゝれゝ李時珍ゝゝいゝに蓋の字を用ひたるゝゝ
ゝゝゝゝ〳〵こはゝに考ふゝゝゝゝゝいゝのゝに〳〵て

そハひいろの中略と思ふ ひふの音通はしてふるゝ拍たるゝ
と紛るゝ ひろの反ひるれど三等の但し白点ハ譬喩体ゆ
ふにかゝりたるなり
〳〵本條白の下にときたるめ〳〵心ハ〳〵 右のめ〳〵解す
〳〵ふ蓋乃字にふの訓自ら分明ときれど古来より明解
なりれハ又明證もなき〳〵ふへ〳〵理に於て如ぐやうれい後人
の考ふ所也 一助ゆ記〳〵虫ゑ條発白乃下に蓋の字にふ
うの訓もなし〳〵注もハ予乃浅見乃誤なれハ和名抄を引て
合せて誤を正すのゝ又今ふゝ云魚ハ白の下に説さるめ〳〵西
乃俗称ゑたゞ〳〵き和名にハなしゝゞ〳〵考へ





[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

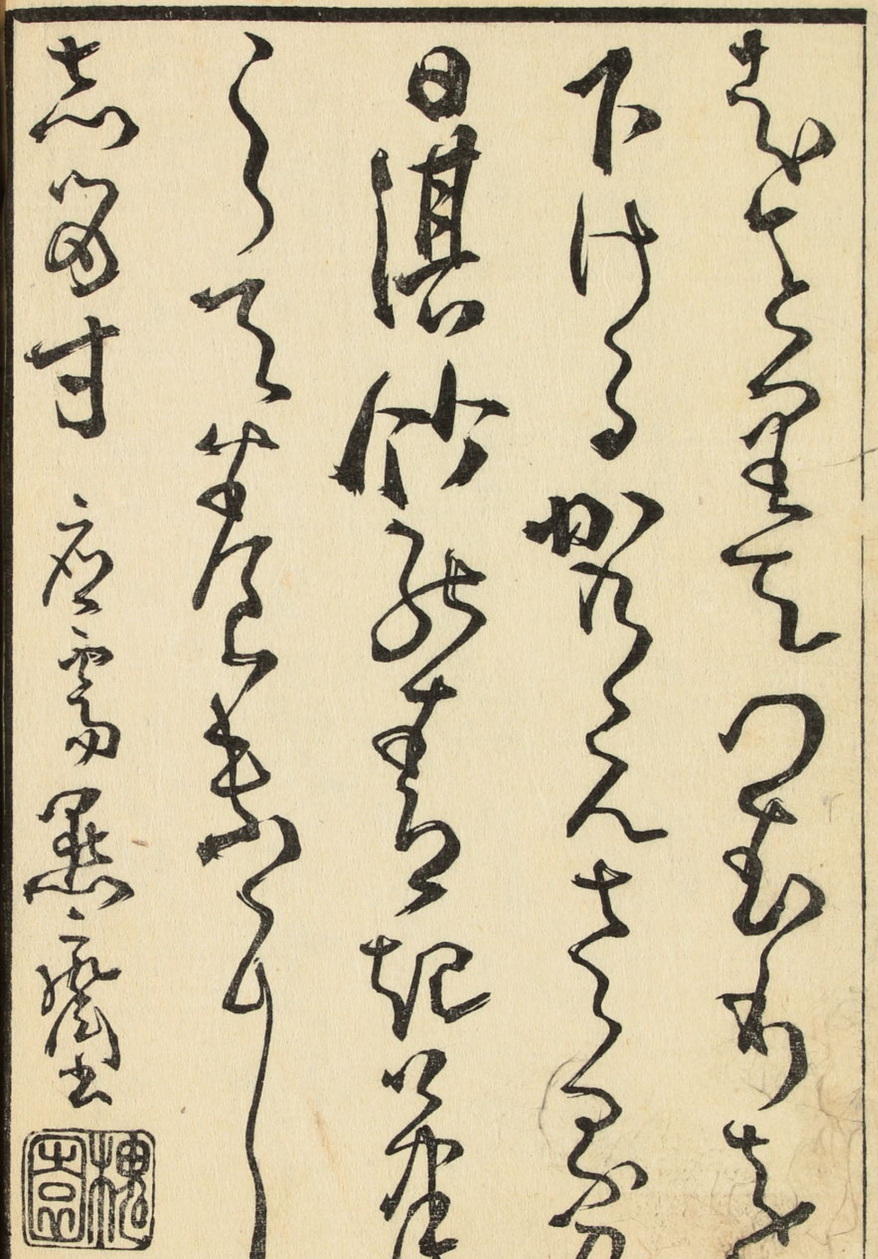
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



京都書林　寺町通松原上ル　三条通御幸町　菊屋七郎兵衛
大坂書林　心齋橋通久太郎町　吉野屋仁兵衛
同　博労町　河内屋喜兵衛
横山町二丁目　出雲寺萬次郎
東都書林　日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛
同　小伝馬町二丁目　林新兵衛
芝神明前　岡田屋嘉七
本石町三丁目　英大助
浅草福井町　山崎屋清七
馬喰町二丁目　菊屋幸三郎